



## 小野梓の藩閥・政黨論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 榎本, 守恵 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00000151">https://doi.org/10.32150/00000151</a>

## 小野梓の藩閥・政黨論

榎本 守 惠

岩見沢分教場史学研究室

Morie ENOMOTO : On The Theories for Clique of Feudal Clans  
and Political Party of Ono Azusa

明治7年1月

臣等伏シテ方今政權ノ歸スル所ヲ察スルニ、上帝室ニ在ラス、下モ人民ニ在ラス、而独有司ニ歸スと冒頭して前参議達が民選議員設立建白をなして以來、澎湃たる自由民権運動の波は全國に反政府運動を捲きこんで發展した。而してこの自由民権運動が当面の敵としたものが薩長藩閥であつたことはいふまでもないが、その斗争が専制反対の反封建斗争であつたか、又は藩閥反対の斗争であつたかは興味あることであろう。複雑な側面を持つ当時の自由民権運動ではあるが、政黨を結成する指導層が、

全國の同志がどういふ主張、政策を持つて居つたかと今の時代の人から質問されると一番困るので、実を言つても何もないのです。要するに薩長藩閥に征服された者が、その征服者に対しての反抗の意味から起つて來たところへ、國會期成という総括した名前の運動が起つて來たので〔中略〕つまり藩閥政府反対が主張であり、主義であり、希望であつた訳なんであつた(註1)

と告白している様に薩長反対が出发点であつたらう。この薩長反対が近代政治思想の洗礼を受けて、その反対の根柢に天赋人權論が設定されたわけである。

小論の課題はむしろこの藩閥専制反対の理論がどの様に主張され、それが近代立憲政治へどの様に織り込まれていつたかを、小野梓という改進黨の理論家を通して考えてみたものである。薩長専制を同一平面に於いて反対するだけなら、それは藩閥の対極に藩閥を形成するか、或はその勢力をより全國的に結集せしめるかだけに過ぎないのではなからうか。明治14年に至つて結成される政黨結合が藩閥に対することを主眼とすると、如何なる

質的前進を論理づけていたのであろうか。

註1 矢野仁太郎氏談話、鈴木安藏著「自由民権」所收

2

明治14年政変が参議首座であつた大隈重信の一派を追い出して國會開設の詔を發布したとき、政府部内では薩長提携の確乎たる体勢の樹立であつたといえる(註1)。従つてこの時点に於いては対薩長と立憲政への進歩的思想を有した官僚達が、大隈をめぐつて勢力を結集する必要があつたのである。かくて結成された立憲改進黨は、反薩長の根柢を彼らの進歩性によつて明快に論理づける立場を考えねばならなかつた。而してこれを最も明快に理論づけたのが掌事小野梓であつた。

かくて福沢諭吉は政府の歴史ありて國民の歴史なしと喝破したが(註2)、小野は國史における政治権力の國民に介在する存り方から専制を批判した。即ち明治15年、黨の政綱第一「王室の尊榮と人民の幸福を謀る」ことの説明として行つた演説「勤王論」に於いてである。我が國に於いては、「王家君臨の本旨は實に斯民の幸福を謀る」にあるのであつて、逆に人民が幸福になる様な政治を行えば勤王の誠を盡くしたことになる。而してこの王家の意志と人民との間に遮蔽体が現れたとき、これが専制の行われる時世なのであつた。彼はこの遮蔽体の在り方を歴史的に批判するのである。

顧みて中古以來の歴史を看るに、我が敬重する王室と、我が親愛する民人は、久しく一二種族に妨碍せられ、其尊榮を保持し、其幸福を享有するを得ざりき。……中古藤原氏の政柄を専有するに當つて、天下の事一に藤原氏の意見に決し、藤原諸葛の如きは遂に、「今の時に當つて誰れか藤原氏の言に違ふものぞ」と云うに至れり。當時天下の威福咸く藤原氏の私門に集り…

…藤原氏に繼いで帝國の政事を專にせしものは、實に平氏の一門たり。當時平家の一門にして高官に任ぜらるゝもの六十余人、其食邑三十余國の多きに至り……「平家の一門に非ざれば、人にして人に非ず」と、我が帝國の政権を一門の中に專有し、我が王室の尊榮を侵し、我が民人の幸福を蔑にせしは藤平二氏に止まれり、然れども平家一たび亡滅し、源家起るに及んで、又其方法を変じて我が帝國の利益を專有する陰謀を企てたり。賴朝は實に平家の政権を一門に私し、天下の怨望を買ひたるに懲り、之を一地方の党類に集め、之を以て專有せんことを企図したるに非ずや（註3）

これをみると彼は、いずれにせよ専制には違いないのではあるが、その専制の在り方に一つの変化を認めていることが知られる。一口に云えば、古代國家に於ける族縁主義的専制から、封建國家に於ける地縁主義的専制への轉換に着眼したのである。実はこの様に一口に専制といつてもそこにある歴史的な變化を掴み得たということは、又轉換期に於ける行動の指針を自ら明白に判断し得ることになる。明治7年の建白の際、副島種臣が君主専制を有司専制に改正せしめ、蘇我馬子も淡海公の子孫も皆有司専制であつたから、とした様な單純な史観ではなかつたことを知らねばならぬ（註4）。勿論地縁主義的専制は賴朝以來続くのであつて、

吾人日本民人は數千年の久しき、始終一地方の種族に専制せられ、或は関東、或は濃尾、或は三河の人士に奴隸使役せられたり 余は之を憶う毎に、憤懣の至に堪えず。願うに是れ明治維新の中興を致せし原因にして（註5）

この地縁主義的封建専制に反撃を加えたのが、彼も17才で参加した維新の事業であつたのであり、「夫の一地方人專有の政治を攘却し、四海平等の公政治を爲さんことを欲し、我が天皇の宸襟を悩まし、我が人民の辛苦して之を成就したる中興の大業なれば」、戊辰東征の如きも「東北の人士は西南人士の勢力に畏れて降伏したるに非ず。天下を平等にし、全國を一致せんとする正理の力に服して反正したるもの」であつた。一先づここで地域専制の廃止・全國一致・日本國民の公政治が主張される。

彼はここでは明らかに維新後の薩長藩閥政府を非難することは憚つているが、然しこの地縁的關係を齎らす風潮については古くから彼の関心事であつた。彼が海外留学から歸つた翌年即ち明治8年、共存雜誌に掲載された論文で、

按ずるに、庚午廢藩の後、人々信じて、海宇の人皆旧藩の弊習を一洗し、東西共に更始すとする者は、是

れ都下の外形を推して辺隅を想像するの一抽臆測にして、全然其眞を失する者也。去歲帰朝以來屢々辺隅の勢を見聞し、深く其実を察するに、往々旧時の面目を存し、動もすれば戊辰以前の形況を全うする者あり。概して之を言え、今日の九州は猶昔日の九州の如く、近時の中國は猶旧時の中國の如し……某縣は某藩の改称にして某藩の旧習を全うす。而して他人も亦某縣の士族と聞いて敬せざるも、旧某州藩士と云へば忽ち驚いて之を尊ぶの氣味あり。其れ然り、故に置縣の名ありて廢藩の實なく、東西相抵觸し南北互に猜疑す……愈々出でて愈々共存の大道を阻す（註6）

と封建割拠の余風の國民共存に大害あることを歎じている。この割拠意識の打破、國民皆仲よく一致することは彼の思想・行動を貫いている主張なのであるが、彼の藩意識嫌悪は彼の生い立ちと共に古い。明治2年郷里土佐より上京して昌平學に学んだ彼は、「はるばる郷里を去て東京に遊びたるはたゞに書物を読み覺ん爲めに非ず、広く佗藩の人に交はりて天下の大勢を知らんず積りなれば」、土州人のみ集つている藩邸の学校には見向きもしなかつたのであつた。これが同輩の憎みを買つて土佐へ呼戻されたのであるが、彼は憤然「斯く藩廳の束縛を受くるは必竟帶刀の身にて士分の列に在ればこそ（註7）」と考へて土籍を脱し自由な平民となつて再び遊学したのであつた。

藩の小天地に踞踏するを屑よしとしなかつた彼は、英京ロンドンに留学するに及んで日本國民共存の意識に高められたといえよう。当時百名余りの日本人留学生達がロンドンにいたが、同じく異郷に学ぶ同胞でありながら尙出身藩を異にすれば、恰も他國人に接するが如く冷淡であつたといふので、この風潮を憂えた馬場辰猪の首唱で日本留学生会が組織され、互の親睦交際を図つたといふのである（註8）。そしてこれが小野の歸朝によつて祖國に持込まれたのが、共存同衆という團體であつたといえる。この共存同衆は12年頃最盛となりかなり活潑な活動をした。その成員も官吏・宗教家・商人・或は華族・士族・平民に亘つて広汎な層に及ぶ組織を以て國民共存を主張したのであつた。

地縁主義的な風潮はこの國民的立場から否定されたのであつたが、明治12年に小野は共存雜誌に再び「唯有日本」と発表し、「あらゆる日本の人々に対し、試みに日本はこれ誰れの日本なる乎」との問を以て前言を繰返したのである。

……一は我々日本民人の共有なるべき日本を某地方に私有せる日本の如くなすものゝ心画なり（註9）  
彼は前年の所論を引用しつつ、

その後五度歳を関し、四度表裏を易へて今日に到れば、往の旧藩知事を迎へてその太守と爲さんとせしものも成らず、その兵を練て戦はんとせしものも敗れ、天下の有様は甚だ變りたれども、夫の彼此相疑りの情は依然として解けず、藩閥の二字は尙ほその勢力を我大日本の社会に溼りせり、今その一二を言へば、人材は某縣の専有せしもの也と言はぬ計りに振舞ひ、又民権は某縣の人のみ知れるが如く独り免許し

と、具体的には当時の藩閥専制や自由民権運動に対する批判である。明治12年といえは同衆の最盛期であるが、その様な風潮にも窺われる様に、自由民権運動に於いても愛國社再興という全國的組織の機運が熱してきた頃である。それにも拘らず小野は自由民権に対しても、地縁主義をかしやくなく問題にせざるを得なかつた。事実民権がその内部に土佐優越を齎らして批判を浴び(註10)、そのため九州勢が別行動をとつたのである。地域主義を憎む小野が、同じ土佐出身でありながら板垣の傘下に参じなかつたのは正にこの点にあるのであつて、明治14年11月1日の日記に、

馬場來訪 渠亦頗傾心於我。併勸余以爲自由政党、  
余論其多以土佐人組成之非。申後日有所答(註11)

と自由党に勧誘されて断る主旨が明らかにされている。勿論他になすあるを期していたのであるし、又急進を好まなかつたものでもあろうが、彼の育ちの上からの郷党意識嫌悪の氣持のあつたことは否定できない。とにかく以上の所説から窺われることは、小野は薩長に反対であつたというよりも、あらゆる意味の藩閥に反対であつたことである。換言すれば、薩長閥を形成する地盤としての当時の風潮、人間結合の在り方に反対であつたのである。先の共存同衆は実にこの様な意味における國民共存の主張であつた。

註1 渡辺梁山 明治十四年政変について 明治文化研究第二輯

註2 福沢諭吉 文明論の概略

註3 勤王論 小野梓全集上巻所收(以下全集と略)

註4 副島種臣談 大津淳一郎著大日本憲政史第一巻所收

註5 勤王論 前掲

註6 共存雜誌第三号「國民蓋思之」全集下巻所收

註7 自傳志料

註8 西村眞次著小野梓傳

註9 共存雜誌第21号「唯有日本」全集下巻所收

註10 自由党史上巻

明治13年3月愛國社から國會期成同盟への轉換に際し、「諸縣委員中或は不平を鳴らし、甚しきは土佐人を挙げて之を除くべしと発議するものあり、意専ら土佐人の多数を制せんことを思むなり、而して正副議長共に立志社の選に帰するを見て、倍々之を快とせざるもの多し、終に議事に際して、好んで秩序を紊さんとす」とある。

註11 留客齋日記第2巻 全集下巻所收

3

我邦ノ庶民久シク抑圧ノ遺風ニ慣レ猶ホ封建ノ余弊ヲ存シ、上下隔絶彼此抵觸シ、一縣ノ居民間々鬪墻ノ態ヲ作シ……

比者同志蓋嘗一小社ヲ立テ目シテ共存同衆ト云ヒ、務メテ交際ヲ親厚ニシ知識ヲ恢弘ニシ、苟モ事人間共存ノ道ニ関ル者、論スベキハ則チ論シ議スベキハ則チ議シ、救フベキハ則チ救ヒ助クベキハ則チ助ケ、以テ人民ノ權利ヲ明ニシ以テ人民ノ義務ヲ励マシ、他日大ニ爲ス有ルノ漸ヲ開ント欲ス(註1)

とは共存同衆設立当時の主旨である。上下彼此、互に孤立している実情を打破せんとして、先づ同衆の主張するのは交際の親厚であり知識の恢弘であつた。

割拠的人間結合の打破、それは先づあらゆる日本人同志の交際親睦によつてなされねばならなかつた。彼は何藩の出身、自分は何藩の者ということに拘りなく、等しく同胞として交際して心情を通じ合うこと、これは小野達が異郷にあつて実行したことの再現に外ならない。このことは、諸藩割拠の打破、國內の統一、公武一体を主眼としてなされた明治政府の政策が、對外危機の問題を重要な条件として成立していることと、その論理の過程は軌を一にしている。只小野はそれをより広汎に在野的立場から主張したのである。これは日本の明治維新及び近代化が西洋諸國の外圧に大きく影響されていた國民的自覺の当然のことではある。勿論こう云つても、在野的立場とはかの支配階級内部の公論乃至公選といつた狭いものではなく、平民層にこそ政府批判の権利がある(註2)、と断言する如き國民的立場にあつたことは重要である。しかしながら彼の國民的立場が、外に対する自覺を契機とする以上、身分制的専制に対する革命性は乏しく、寧ろ身分差を超えた交際によつて國內の共存感情を育くもうとしたに過ぎない。従つて彼の國民共存が交際を主とする限り、例えば、「如何して本邦人をして恋士の私情を拡充し、愛國の公心を奮起せしむるに切なるや」の間に答えて、「敵國の外に環列するを知らしむべし(註3)」という、日本人同志の協同の同胞感情であつた。いわば藩閥が郷党相倚る感情的結合であるとすれば、これはそれを全國的に拡大した感情的結合なのである。それが國內市場完成を願うブルジョアの意義をもつ

たにせよ、共に郷土的親近感を基礎とする限りそれは同一次元のものであるといえる。政治的に近代的天賦人權論を唱えて藩閥を否定して同盟するには、未だ論理的に弱いといわねばならぬ。民選議院建白以來各地に政社が発足して輿論を捲き起した。しかしこれらの政社が郷党的結合であつてよい筈はない。

共存同衆が交際の親厚と共に掲げた今一つの言葉は知識の恢弘である。知識の普及が齎らしてくる結果、これが次の課題を提示するであろう。相互的接觸が交際によつてのみ齎される親近感は郷土的共属感情である。けれどもそれが知識を媒介として次第に高められてくるとき、そこに選択意志が働いてくることを予想しなければならぬのである。しかも政治は本来目的合理的なものである。政治の在り方に於ける藩閥的傾向が歴史的に批判されるならば、当然藩閥反対側に新しい結合の原理が主張されねばならない。共存同衆は先づ交際の全國的拡大と知識向上との上に論理的役割を果たしたのであつた。

共存同衆は交際の親厚と知識の恢弘という面に於いて相当な事業をしている。讒謗律の建言・酒田事件に関して・或は日本最初の書籍館及び会館の設立・雑誌発行乃至講談演説・国会開設の建言・更には條約改正促進のため日本の事情を欧米各國に訴える等(註4)。しかし特に最初に挙げた讒謗律は、華族秋月種樹が新聞投書によつて中傷されたのを、共存交際の主旨から救つた(註2)事に端を発しているのであるが、この矯激な言論が親睦交際を害するが故に取締らねばならぬとする、同衆の善意的主張が結果的には民権輿論の制限となつたわけである(註6)。全くこの様な逆効果は、共属感情に於ける交際親善の段階の限界を示すものといえよう。

しかし小野が国会開設尙早ならずと叫んで、國民のそれを希求する意志あることを強調するとき(註7)、それは意志的結合の存在を政治的に予想しなければならなかつたのである。

註 1 共存同衆條例緒言 朝野新聞明治7年12月15日

註 2 「権利之賊」全集下巻

註 3 「國民蓋思之」前掲

註 4 明治11年小野梓の同衆4週年記念演説による。永田新之丞著小野梓所収

註 5 日新實事誌明治7年11月8日152号の不能黙齊の投書に対し、同月22日同紙163号に同衆の弁護が見られる。

註 6 小野の前掲4週年演説に「讒謗律に付き建言せし事あり、此建言に就ては我々が世に冤を蒙るものあれども、今之を弁せざるを却て大人氣ありと思へば殊更に言はず」とあり、同衆の一人だつた三好退蔵の祭文にもその旨述べられ、且つ當時の法制官尾崎三良は同衆員であつた事等、同衆と讒

謗律との關係を物語るものである。尙この点山本文雄著本日新聞史参照。

註 7 共存雜誌第60号「誰言國會之開設尙早乎」全集下巻。これは13年3月の発表であるが稿は明治9年初夏の作という。国会開設論の理由として「人情の常則よりして之を推せば、邦人誰か其参政の権を願はざらん云々」その他脊きに論じている。

4

國民共存によつて割拠的結合の風潮を批判した小野は、次にこの地域専制・郷党意識を排除した後に來るべき政治の在り方として何を考えたであろうか。勿論それは立憲政治・国会開設によつて政權は國民の前に分散されることはいうまでもない。しかし政治の在り方として彼は個々の單なる集會が地域主義に代るものと主張するのではない。彼にとつては藩閥専制に代つて來るべきものは政党政治・責任宰相制による政治の在り方であつた。

「立憲政治ノ眞体ハ、政党ノ政タルカ故ニ」、或は「立憲ノ政ハ政党ノ政ナリ、政党ノ争ハ主義ノ争ナリ」とは既に改進黨總理大隈重信の政府部内で物議を醸した上奏に見えているが(註1)、小野等がこの考を承けていることはいうまでもない。彼は「政党政治」論の中で、この政党たるものの意義・結合の仕方について説明している。

政党トハ何ソヤ、政治ニ就キ同一ノ意見ヲ有スル人々相結合シテ、其意見ヲ貫徹セン事ヲ求ムルモノ是ナリ(註2)

と。政治に関する同一の意見あるものの結合これである。即ち地域を同じくするものの感情的な結合ではなしに、主義を等しくするものの思想的な結合、これが近代日本としての政治に於ける政治家の結合の在り方なのであつた、前の「勸王論」に續けてみて、歴史に於ける封建的なものから近代的なものへの發展、政治の在り方を彼はかくの如く読みとつたものであるといえる。

主義によつて結合するものが政党であるならば、政党はここにその主義及び施政の方針を明示せねばならぬ。目的合理的に選択意志に従つて結合する集團の在り方の主張である。

我党は断然其主義を明示し、判然其尙ぶ所を定めざるべからず。而して其主義は渺漫渾沌たるものに非ずして、必ず判別明知すべきものたるべし。又我党尙ぶ所の主義は、一時暫且のものに非ずして、億万斯年に傳ふべきものたるべし(註3)

小野の起草にかかる「何以結党」は正しくこの点を主張しているものであり、かくて立憲改進黨は約束第二章に

於いて、「我党は帝國の臣民にして左の冀望を有するものを以て之を團結す」として、「王室の尊榮を保ち人民の幸福を全ふする事」以下「貨幣の制は硬貨の主義を保持する事」に至る(註4) 6項目の施政の方針を明らかにし、更に「施政の要義(註5)」を以てより具体的に党の方針を発表したのであつた。だから小野が自由党に対して抱く不満は土佐人が多いというそれだけではなく、自由党の持つ性格が國會開設の準備党としての匂が強く、施政党としての実が乏しい点にもあつたのである(註6)。彼の「政党政治」に、「國會開設ノ徑阿ヲ論議スルニ止マル準備政党」は大詔喚発後の今日最早必要なことを論じ、後段に於いて「自由党ニ臨ム」こととして

政党ニ尊フ所ノモノハ其ノ施政ノ主義ヲ以テ堂々タル論上ニ相対スルヲ以テナリ(然るに)諸君ハ未タ施政ノ主義ヲ明言セザルナリ

と述べていることはこの間の事情を物語るものであろう。

政党が當時に於いて郷党相倚るの藩閥に代つて思想的結合を以て近代的政治の在り方を打出そうとするとき、その思想的結合が具体的にはどの様に細緻されて行つたか。小林雄七郎はその著作「薩長土肥」に於いて、自由・改進黨と雖も土・肥の運轉する列車に過ぎないと述べているけれども、当時の政党が曲りなりに主義主張によつて全國的組織をなし得たことは否定できないであろう。大雜把に云つて、立志社 → 愛國社 → 國會期成同盟 → 自由党のコースを辿れば、地方政社が次第に全國的に組織されたものとして、むしろ郷党的結合が出発点をなしているが、それらを連繫するものが藩閥専制反対・自由民権・國會開設という主義の一致であつたのである。しかし東洋議政会・嚶鳴社・鷗渡会を連ねる改進黨は郷党的結合を持たないだけ、又如上三社が始めから一つの主義の下に集つていただけ、自由党よりは思想的結合の形を深くしている様に見える。問題は母胎的存在であつた三社の結合の仕方にある。

今小野に率いられた鷗渡会についてみると、彼の留客齊日記明治14年8月20日に、

此日。小爲。高早等來話。決樹立一<sup>下ニ</sup>一<sup>上</sup>政黨之議

とあるのが出発点をなす様であつて、始めから政党的主義主張を以て組織を固つた様である。当事者である高田早苗によると、

それから段々話が進んで、兎に角君達は大学に於て、政治・経済という様な当世必要の学問をして居るのであり、自分は又實際政界に身を置いて君達の知らぬ事を多少知つて居るから、君の友人中でこれほと思ふ人があつたならば、幾人でも連れて来て一週一度会

合し、互に知識の交換をしようという事になつた(註7)

とある。かくて高田は極めて慎重に学友の人選を考えたのであるが、更に山田一郎の「梧堂追思録」には、

鷗渡会の面々は固より情実的に團結せるに非ずして、主義の同じき処より一味となれるものなり……(小野の意見も)諸氏の説と異趣同巧なるに由り、茲に自然の主義上結合を成就せるものなり(註8)

と主義思想の一致による結合たることを認めている。小野とこれら学生達との間が知識交換を通じて更に思想的親近性を持ち、結合が強められたと考えられるのであるが、事実は小野の指導性による教育的場に於いて思想的結合を持つたと考えてよいであろう。同志市島謙吉が、「考えてみれば、先生は吾等が政治生活を始めるに就いての第一師である(註9)」という述懐は、決して單なる故人回顧の意味と解すべきではない。実はこの教育的場といつたものが問題なのであつて、これは等しく慶應義塾の同門を以て中心とする東洋議政会にはよりよく当てはまるものと思われる。主義思想の普及は教育の力によること大であることは今更論ずるまでもないが、特に当時の啓蒙的段階にある時、教育的關係を通じて思想的結合がなされて行くことは当然である。嚶鳴社に於いてもこの關係を全然否定することが出来ぬ。明治初年福沢と双璧をなしたといわれる尺振八の共立学会出身がその中心をなしているのは(註10)、全く同様の事情と見做して差支えあるまい。然もこれら三社の人々は——鷗渡会の学生達は別として——日頃學術を論じ合う交際圏の人人であつたことは、小野の日記を見ても云い得ることである。實際かく考えると後年の大隈脱黨騒ぎの際、脱落したメンバーがこの思想的結合の濃厚な三社以外の旧官僚であつたことも肯づける。而してこの教育的場の思想結合は強ち改進黨系のみではないのであつて、立志社を始め各地方政社が行つた学舎・法律研究所等による青年指導は(註11)、正しくこの教育的場を通じての思想的結合の役割を果したものといえよう。

明治16年11月、大隈に宛てて新潟縣下の状況を報じた箕浦勝人の書翰に

第一 苟くも政治思想ある者は皆自由党(北辰頸城其他各所之地名等を附し同類異名之自由党数多有之)に加盟し剩す所之者は大抵無政思之徒のみ未だ公然加盟せざる者も多くは種々之事情より該党之賛成者と公認せられ該党に縁故ある者之如き形を顯はし、外形より之を觀れば殆ど他党をして手を着るに由なからしむるか如し

第二 略

第三 多少之資産あり或は資産なきも相應に常識ありて最も政治思想を有する者は縣會議員及び代言人なり其中には相應之人物もあり我党に賛成者あり云々(註12)

と述べていることは、実際には縁故関係・親分子分関係その他の要素を含むとしても、政党結合の主要なる原理が政治思想の共鳴にあつたこと、政党が思想によつて結ばれんことを意図した証拠である。

政党が多かれ少なかれ思想的結合により、主義主張の相違を以て政府に相對するとき、政府も又主義による結合としてこれに應えなければならぬであらう。思想性を強く主張する小野は、同時にその國民共存の思想から云つても、現政府は彼らと主義を異にする敵政党として對置され、「今日ニ當リテ我儕ノ好敵手トナスヘキ者諸公ヲ措テ他ニ其人ナ(註13)」しと、自由・改進の兩進歩政党に対する保守政党と視するのである。かくみるとき、

今日ニアリテ我儕未タ確カニ諸公ノ主義トスル所ヲ認ムル能ハス……諸公ハ概シテ我儕ト共ニ改進主義ヲ持スルノ人々タリシハ天下ノ許ス所ナルヘシ、其ノ一昨冬ノ改革ヨリシテ俄然保守ノ主義ニ変スル所ナルヘシ……既ニ施政ノ主義ヲ明カニシテ政党政治ノ基礎ヲ定ムル事ニ着手スルニ於テハ、内閣諸公ハ必ラスヤ地方党・種族党ノ嫌疑ヲ避ケル事ヲ勉ムヘシ(註14)

と主義の明示と藩閥の色彩除去が要求されるのであつた。

安んぞ知らん、政府党の主義は既に確立し、14年大詔喚発後の一步優位の体勢裡に、然も極秘裡に着々と絶対主義的立憲政への過程を辿つていたのであつた。

註1 大隈重信関係文書第4

註2 「政党政治」内外政党事情紙明治15年11月23日より16年1月27日に亘る社説。同紙は小野が山田一郎らにやらせた改進黨小野派の機関紙で、右社説は筆者名がでていないけれど、文章及び内容からみて小野の筆になることは間違いないと思われる。

註3 何以結党 全集下巻

註4 大隈重信関係文書第5に依る

註5 施政の要義 全集下巻所収参照

註6 前掲の伊藤仁太郎氏談話にも窺われるし、又「日本歴史講座」近代篇概説(遠山茂樹氏)も参照せられたい。

註7 高田早苗著半峯昔ばなし

註8 梧堂追思録(山田一郎)梧堂言行録所収

註9 市島謙吉「学園の恩人小野梓先生を憶ふ」早稻田学報第37号所収

註10 指原安蔵著明治政史の評論による

註11 自由党史上巻

註12 大隈重信関係文書第5

註13 政党政治 前掲

註14 同上

5

さて藩閥専制反対を唱えて天賦人種論を振りかざした自由民権運動の政党結成を、以上の観点から見る事ができる。即ち共属感情の結合の否定から意志的思想的結合への発展という論理過程を打出したところに、小野梓の優れた政党組織論の意義を見るのであるが、実はかく見ることが可能なことによつて、次の如き展望をなすことが可能であらう。

明治18年から20年にかけての官吏任用制度によつて基礎が作られた、藩閥から所謂官僚閥への轉身は、思想的結合としての政党に對應する、政府側の意志的思想的結合と見做すことができよう。ロエスレル・井上毅・伊藤博文のラインが法的に政党を認めず、超然内閣制をとつたことは周知のことである。しかしこの超然が客観的な超然ではなく主観的に超然たろうとするとき、それはもはや超然と云い得るかどうか疑問である。同じくこのラインに連なる優れた文部大臣森有禮の意見

凡ソ人々ノ思想嗜好ハ、素ヨリ同一ナル能ハズ。是ニ於テ、政治上ノ所見モ各其説ヲ異ニスルヨリ、同臭ノ人相集マルトキハ、一ノ結合ヲ爲シテ、民間自然ニ政党ヲ成スニ至ルハ、亦免レ難キノ事情ナリト雖ドモ、若シ内閣ニ於テ此等ノ政党ヲ圧セント欲シ、之ニ對スル結合ヲ謀ルトキハ、知ラズ識ラズ自ラモ亦一ノ政党トナリ云々(註1)

は、実は政府の政党化・傾向化を避けようとする忠言である。しかしこの言葉の裏に、「若シ政党ヲ圧セント欲シ云々」はもしてではなく既定の事実としての政党の彈圧と、官僚達の同一傾向の團結を固めていたことの事実を物語るに足る。特にその際帝國大学に強調される意義と、その卒業生に與えた文官任用に関する特權は、かつて帝國大学卒業の優秀な学士高田早苗らを、政党側に思想的に奪取されたことに対する逆の立場の思想的強化とその予防であるといえるのではあるまいか。

反政府運動の政党化、これに対して藩閥の官僚閥化、これらを通じるものとして政治思想による結合を問題点として、それを近代政治化の過程の側面として眺めたわけであるが、この観点を当時明治15・6年の情勢に置いてみたときにどうなるであらうか。一言補足するならば、貧農・小作農に至るまで捲きこんで殆んど國民運動化していた当時の自由民権運動の激化に対して、この思想的結合の主張は下部大衆を政治運動の線上から切り離

榎 本 守 恵

す可能性をもつたのである。自由民権運動の国民上層部のみの限定である。老成の学者・資産家・中等以上の人士を以て組織せんとした改進黨の理論的指導家小野梓の近代的政黨組織論は正しくかくの如きものであつたので

ある、

註 1 「政党内閣ノ非ヲ論ス」大久保利謙著森有胤原典篇所收